

存在文と不定名詞句の意味解釈

東郷雄二

1. はじめに

il y a 存在文というと、次例のように場所句を持つ例が挙げられることが多い。このタイプの存在文は、場所句が表す空間内に対象が存在することを述べる。(2)のように場所句がない場合でも、先行文脈によって空間が前提されていることが多い。

(1) *Il y a un livre sur la table.*

(机の上に本が一冊ある)

(2) *Qu'est-ce qu'il y a dans la valise ? — Eh bien, il y a des vêtements.*

(「スーツケースの中に何があるのですか」「えーっと、服があります」)

存在文は何かの存在を述べる文であり、存在するものは「どこかに」存在するのであるから、場所句を必要とするのは当然と考えられる。

ところが、必ずしもそうとは言えないことは次の例が示している。

(3) *Il y a deux clefs qui ont disparu.*

(なくなった鍵がふたつある)

(4) *Il y a des pages qui manquent.*

(落丁のページがある)

(3)を例にとると、鍵はなくなったのだからここにはない。「ない」ものについて「ある」と述べる文が矛盾文にならないのはなぜだろうか。また鍵はここにはない。では鍵はどこにあるのか。この問題に答えるためには、存在文にとって不可欠の概念として「存在領域」を考える必要があるのだが、今までの研究で触れられたことはほとんどない。本稿の目標のひとつは、例(1)(2)と(3)(4)の「存在領域」の相違を明らかにすることにある。

東郷(2005)で筆者は、Cannings(1978)の議論を踏まえて、あらゆる文にはそれが解釈される「関与的領域」(*demain of relevance*)が必要であることを論じた。存在文における存在領域は、この関与的領域のひとつのケースだと考えることができる。

この問題の考察に入る前に、予備的事柄に若干触れておく。存在文のタイプ分類としては、英語の *there* 構文について Lakoff(1987)が行なった分類が最も細かい。フランス語の *il y a* 構文については、めぼしい分類の試みが見あたらない。しかし諸家の所見を総合すると、暫定的に次のような分類が成り立つ。

(A) *il y a* locatif 「所在の *il y a*」

Il y a des élèves dans la cour.

(校庭には生徒が数人いる)

(B) *il y a existentiel* 「存在の *il y a*」

Il y a des choses qui ne se font pas.

(してはならないことがある)

(C) *il y a événementiel* 「出来事の *il y a*」

Qu'y a-t-il donc ? — Il y a que j'étouffe. (朝倉 1981)

(「どうしたというのです」「息が詰まりそうなんです」)

(D) *pseudo-relative* 「擬似関係節の *il y a*」

Alphose, il y a le plat de faïence qui vient de casser. (Aymé, *Les contes du chat perché*)

(アルフォンス、陶器の皿が割れちゃったよ)

(E) 「リスト文」

Qui peut nous aider ? — Il y a Paul.

(「誰が手伝ってくれるだろう」「ポールがいるよ」)

場所句を必要とするのは (A)の「所在の *il y a*」だけで、他は必要としない。それぞれのタイプには興味深い問題があるが、紙幅の都合で (A)と(B)に話題を限る。

本稿のもうひとつの目標は、存在文に生じる不定名詞句の意味解釈を明らかにすることである。(A)「所在の *il y a*」と(B)「存在の *il y a*」とでは、存在領域が異なるのみならず、不定名詞句の意味解釈もまた異なることを論じる。

2. 存在文の2種類の存在領域

「所在の *il y a*」で存在領域は場所句が表すことは明らかである。*Il y a des élèves dans la cour.* (校庭に生徒がいる)では、生徒がいる場所は校庭である。では、「存在の *il y a*」に関わる存在領域はどこだろうか。古川 (1996)がこの問題に部分的に答えているので、その分析を見てみよう。

McCawley (1981)は次のふたつの文で、*beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra* の解釈が異なることを指摘した。

(5) *Beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra écoutent les émissions de Met radio.*

(オペラ好きのアメリカ人のなかには Met 放送局の番組を聴いている人が多い)

(6) *Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.*

(アメリカ人のなかにはオペラ好きな人が多い)

(5) は *Américains qui aiment l'opéra* (オペラ好きのアメリカ人) を母集合として、そのうちの多くの人が Met 放送局を聴いているという意味で、量化子のかかる集合を制限節として表現する三分構造の論理式で書くと(7a)のようになる¹。一方、(6)は *Américains* (アメリカ人) を母集合として、そのうちの多くの人がオペラ好きだという意味で、論理式は(7b)に対応する²。このように、一見すると同じ関係節付き名詞句に見える *beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra* は、(5)のように主語位置に立つときと、(6)のように *il y a* 構文の実主語

のときとでは、量化子 *beaucoup de* が走る母集合が異なるのである。本稿が関心を持つのは、(7b)の論理式に対応する意味を持ち「存在の *il y a*」に属する(6)である。

- (7) a. $\text{beaucoup}_x [\text{Américains-qui-aiment-l'opéra} (x)] [\text{écouter-les-émissions-de -Met-radio} (x)]$
b. $\text{beaucoup}_x [\text{Américains} (x)] [\text{aimer-l'opéra} (x)]$

さて、上で「所在の *il y a*」の存在領域は場所句が表すと述べた。*ily a* の表現する存在の意味が、存在量化子によって翻訳されると仮定すると、「所在の *il y a*」には次のような式を与えることができる。

- (8) $\text{Il y a des élèves dans la cour. } \exists x [\text{élève} (x) \wedge \text{dans-la-cour} (x)]$
(校庭には生徒が数人いる)

この式では *dans-la-cour* (x) が存在領域に相当し、存在量化子の作用域内に入る。ところが(6)には同じ式を与えることができない。

では(6)の「オペラの好きなアメリカ人」が存在するのはどこかということ、それは「アメリカ人」という母集合のなかである。つまり「存在の *il ya*」が指定する存在領域は場所的なものではなく、量化子が走る集合であり、具体的には(7b)の制限節[*Américains* (x)]である。(6)は「アメリカ人」を母集合として、「そのなかでオペラ好きな人」の部分集合が大きいことを意味している。同じように (3) *Il y a deux clefs qui ont disparu.* (なくなった鍵がふたつある) は「鍵の集まり」を母集合とし、母集合のうち「なくなったもの」の部分集合が空ではなく、その元の数か2であることを述べている。だからこの文は「ないものがある」という矛盾したことを述べているのではない。「ない」のは話し手を含む現実の時空間であり、「ある」のは鍵の母集合である。だからこの文は矛盾文にはならないのである。

3. 存在文における名詞句の解釈

次に「所在の *il y a*」と「存在の *il y a*」には、名詞句の解釈の差がある。英語の裸複数名詞は、総称解釈と存在解釈できることが知られている (Diesing 1992)。

- (9) a. *Brussels sprouts are unsuitable for eating.* [総称解釈]
b. *Carpenter ants destroyed my viola da gamba.* [存在解釈]

この差は文の述語のちがいに由来する。(9a)の *be unsuitable for eating* のような個体レベル述語では総称量化が誘引され、(9b)の *destroy* のような局面レベル述語では存在量化が起きるために存在解釈されると考えられている。

さて、Lumsden (1988)は *there* 構文の裸複数名詞について、次の指摘をしている。例(10a)では、可能なはずの裸複数名詞の総称解釈は阻止され、*There are (some) dogs (over there).* のような存在解釈しかできない。一方、(10b)は「爬虫類のなかには単性生殖のものがある」という(6)と同じ部分集合読みになる。

- (10) a. There are *dogs*.
 b. There are *reptiles* that are parthenogenetic.

これはなぜだろうか。原理的には可能な裸複数名詞の総称解釈は、なぜ *there* 構文で阻止されるのだろうか。また (10b)は *There are (some) reptiles that are parthenogenetic (over there)*. のような存在解釈はできない。これはなぜだろうか。

このふたつの疑問に答えるためには、名詞句の指示対象の存在論的レベルに関わる考察に進む必要がある。

4. Carlson(1977) の存在論

Carlson (1977) は、事物の存在レベルを *kind* 「類」 *object* 「個体」 *stage* 「局面」の3つに区分した。*kind* はこの世に存在する種としての「犬」のレベルで、時間にも空間にも束縛されない永続的存在と見なされる。*object* は「うちで飼っている犬のポチ」のレベルで、時間には束縛されないが空間に束縛され³、同時に二個所にあることはできない。*stage* は *object* または *kind* が時間軸に沿ってスライスされた切片で、時間にも空間にも束縛され、ある時間幅である場所にしか存在できないとされる。この三者の関係は論理式(11)によって定義される。

$$(11) \forall y^k \square \forall x^s [R(x^s, y^k) \rightarrow \exists z^o [R'(z^o, y^k) \wedge R(x^s, z^o)]]$$

上付きの *k* は *kind* レベルを、*o* は *object* レベルを、*s* は *stage* レベルを表す。 $R(a, b)$ は実現関数 (realization function) で、*b* から *a* を切り出す作用を表す。 \square は必然性演算子である。上の式を自然言語に読み下すと、「あらゆる *kind* レベルの y^k について、 x^s が y^k の *stage* レベルの実現であるなら、 y^k の実現でありかつ x^s がその実現でもあるような *object* レベルの z^o が存在することが、必然的にすべての x^s について成り立つ。」となる。Carlson の存在論を直感的に理解するには、次のエピソードが有用だろう。

- (12) 西表島で未知の哺乳類の目撃情報が相次いだ。調査隊は出沒地点に赤外線カメラを設置した。やがてネコに似た動物の赤外線写真が一枚撮影された。この動物は新種の哺乳類と認定され、「イリオモテヤマネコ」と命名された。

写真に写った動物は、ある場所での一瞬の姿だから *stage* レベルである。一瞬でも目撃されたということは、*object* レベルの個体がいるということであり、それは類 *kind* としての新種がこの世にいることを意味する。(11)の式はこのような論理を表している。

Carlson は英語の裸複数名詞は本来的に *kind* を表すとした。したがって (13) のように *kind* に直接言及する総称文は次の式で表現される。 DOG^k は *kind* レベルの犬を表す。

- (13) *Dogs* are intelligent. intelligent (DOG^k)

一方、(14)は stage レベルの犬を表している。R (x^S, DOG^K)は kind レベルの犬から stage レベルの犬を切り出す実現関数である。

(14) *A dog is barking.* $\exists x^S [R (x^S, DOG^K) \wedge bark (x^S)]$

では(10) *There are dogs.* がなぜ総称解釈できないかという問題に戻る。Lumsden (1988) は Carlson の存在論に基づいて、次のように説明している。(10)に理論上可能な論理表示は2種類ある。

(15) *There are dogs.* (=10)
a. $\exists x^K [x^K \subset DOG^K]$
b. $\exists x^S [R (x^S, DOG^K)]$

(15a)は kind レベルの犬の存在言明であり、意味的に冗長で情報的に無内容である。なぜなら私たちは、kind レベルの犬がこの世に存在することはすでに知っているからである⁴。したがって、kind レベルの存在を *there* 構文を用いて述べることはできない。残る可能な解釈は (15b)の stage 解釈ということになる。以上の考察から *There is / are NP.* 型の *there* 構文では、実主語 NP は stage レベルの存在として談話に導入されると結論できる。これで前節で提起したひとつ目の問題は解決したと見なしてよい。

5. 「存在の il y a」と存在レベル

次はふたつ目の問題、すなわち (10b)の *There are reptiles that are parthenogenetic.* を存在読み、すなわち stage 解釈できないのはなぜかという問題を考えることにしよう。例を再掲する。

(16) a. *Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.* [= (6)]
b. *There are reptiles that are parthenogenetic.* [= (10) b.]

ここで、一般に名詞句の stage 解釈がどのような経路で得られるかを考えてみよう。名詞句が stage 解釈されるためには、文の述語による時空間的切り出しが必要である。例えば(17)では、過去形に置かれ出来事読みされる局面レベル述語 *croiser* (すれ違う) が特定の時空間を切り出し、名詞句 *une femme en noir* (黒服の女性) に stage 解釈を付与すると考えられている。

(17) *J'ai croisé une femme en noir.*
(私は黒服の女性とすれ違った)
 $\exists x^S [R (x^S, FEMME^K) \wedge en-noir (x^S) \wedge croiser (je, x^S)]$

もし述語が個体レベル述語だと、(18)のように時空間の切り出しがないので、*un bon*

restaurant (いいレストラン) は object 解釈になる。

(18) Je connais un bon restaurant.

(私はいいいレストランを知っている)

$\exists x^0 [R(x^0, \text{RESTAURANT}^K) \wedge \text{connaître}(je, x^0)]$

このように名詞句の stage 解釈を得るには、局面レベル述語による時空間の切り出しが必要なのである。

では以上を踏まえて、stage 読みできる「所在の il y a」と、stage 読みできない「存在の il y a」を比較してみよう。

(19) a. 所在の il y a

Il y avait des voitures délaissées dans la rue.

(道路には放置された自動車が残されていた)

$\exists x^S [R(x^S, \text{VOITURE}^K) \wedge \text{délaissé}(x^S) \wedge \text{dans-la-rue}(x^S)]$

b. 存在の il y a

Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra. [= (6)]

$\text{beaucoup}(x^0) [R(x^0, \text{AMERICAIN}^K)] [\text{aimer l'opéra}(x^0)]$

「所在の il y a」では、y avoir の局面的使用によって stage 読みに必要な時空間の切り出しが行なわれる。一方、「存在の il y a」は、y avoir を出来事や一時的状態を表す過去形に置くことができない。Autrefois, il y avait beaucoup d'Américains qui aimaient l'opéra. (かつてはアメリカ人のなかにはオペラが好きな人がたくさんいた) のように、現在形以外では習慣的過去にしかできない。このために、「存在の il y a」では時空間の切り出しが起きず、実主語の名詞句は object 解釈されるのである。

「〇〇のなかには××な人がたくさん / 少しいる」のような読みを「部分集合読み」と呼ぶと、このような集合にたいする量化操作は、集合の元が object レベルであることを前提とし、また要求すると考えることができる。それは object レベルの存在が時間的に安定しているからである。時間的に安定した要素でなくては集合は形成できない。

このために、時間的に安定しない存在である stage 読みでは部分集合解釈は生じない。次の「所在の il y a」では、「消防士のうち負傷した人がたくさん病院にいた」という部分集合読みが予測どおり不可能なことを確認できる。

(20) Il y avait beaucoup de sapeurs-pompiers blessés à l'hôpital.

(病院にはたくさんの負傷した消防士がいた)

ここで今までに論じた「所在の il y a」と「存在の il y a」のちがいをまとめておこう。

(21)	所在の il y a	存在の il y a
場所句	あり	なし
存在領域	場所句の表す時空間	実主語の主要名詞の母集合
解 釈	存在解釈	部分集合解釈
存在レベル	stage レベル	object レベル

6. 「存在の il y a」における関係節の述語

さて、本節では「存在の il y a」に生じる関係節の機能について考えてみよう。Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra. が部分集合解釈されるためには、関係節が不可欠である。関係節は母集合である Américains (アメリカ人) にたいして、(qui) aiment l'opéra (オペラの好きな) という属性を指定することで、部分集合を形成する。このため、関係節を削除すると、もはや部分集合解釈することができず、場所句を省略した「所在の il y a」の解釈になる。

(22) Il y {a /avait} beaucoup d'Américains.

(アメリカ人がたくさんいる/いた)

次に関係節の述語に注目しよう。(16a)の (qui) aiment l'opéra も (16b)の (that) are parthenogenetic も個体レベル述語である。個体レベル述語は「個体」である kind と object にしか適用できない。前節で「存在の il y a」の実主語は object レベルであることを示したので、述語が個体レベル述語である事実とはうまく整合している。

しかし、ここで奇妙な事実を観察することができる。次の例を見てみよう。

(23) a. Il y a beaucoup d'étudiants qui ont attrapé la rougeole cette année.

(学生のなかには今年はしかにかかった人がたくさんいる)

b. Il y a pas mal de coureurs qui ont abandonné à mi-chemin.

(ランナーのなかには途中で棄権した人がかなりいる)

これは部分集合読みの「存在の il y a」だが、関係節の述語は局面レベル述語である。局面レベル述語は stage レベルの変数を取ることで、実主語が object 読みだとすると、次の式のように述語が取る変数の存在レベルが食い違い、非文になるはずである。これはどのように考えればよいだろうか。

(24) Il y a beaucoup d'étudiants qui ont attrapé la rougeole .

beaucoup (x^0) [R (x^0 , ETUDIANT^K)] [attraper-la-rougeole (x^S)]

直感的には次のような筋道で説明できる。ある大学の学生の集合を考える。これは object レベルの要素の集合である。さて、ある年にはしかが流行して、多くの学生が罹患したとする。「はしかにかかった」という出来事は、一時的な出来事であり stage レベルである。

しかし、その出来事によって「はしかにかかった」という履歴は学生に残る。あるクラスで「今年のはしかにかかった人は手を挙げて」と言えば、クラスの何人かの手が挙がるだろう。これは **object** レベルの部分集合である。つまり、**stage** レベルの「はしかにかかった」という出来事が、病歴という学生の永続的属性に昇格し、その属性を基準として部分集合の形成が可能になると考えられる。

以上が直感的な説明だが、意味論ではこれを「**stage** レベルから **object** レベルへのアップデート」と表現できる。まず、「学生がはしかにかかった」という元になる出来事においては、学生は **stage** レベルの存在である。

(25) Des étudiants ont attrapé la rougeole.

(学生が[何人か]はしかにかかった)

$$\exists x^s [R(x^s, \text{ETUDIANT}^k) \wedge \text{attraper-la-rougeole}(x^s)]$$

次に「はしかにかかった」という出来事が、永続的に成り立つ属性として再解釈され、学生は **stage** から **object** にアップデートされる。これは次のように表現できる。 P^k は任意の名詞述語を表し、この例では ETUDIANT^k に相当する⁵。

$$(26) \exists x^s [R(x^s, P^k)] \rightarrow \exists x^o [R(x^s, x^o)]$$

この式は、**kind** レベルの P の **stage** レベルの実現 x^s があるときは、必然的に **object** レベルの x^o が存在することを意味する。これを(25)に適用してみよう。

(27) Des étudiants ont attrapé la rougeole. (=25)

$$\exists x^s [R(x^s, \text{ETUDIANT}^k) \wedge \text{attraper-la-rougeole}(x^s)]$$

アップデート $\exists x^s [R(x^s, P^k)] \rightarrow \exists x^o [R(x^s, x^o)]$ を適用

$$\rightarrow \exists x^o [R(x^o, \text{ETUDIANT}^k) \wedge \text{attraper-la-rougeole}(x^o)]$$

このアップデート操作により、**stage** レベルの学生から **object** レベルの学生を得ることができる⁶。これにより(24)で見た存在レベルの齟齬は解消される。このように、局面レベルの出来事を元にして、個体レベルの部分集合を形成することができるのは、「存在の *il y a*」における関係節の働きによる。この関係節の働きについては、さらに詳細な考察が必要であるが、本稿では紙幅の関係からここまで留める。

ついでながら「所在の *il y a*」の場合は、たとえ関係節があってもこのアップデート操作は起きないことを確認しておこう。

(28) Dans l'hôpital, il y avait beaucoup d'étudiants qui ont attrapé la rougeole.

この文の読みは、「病院には学生のうちではしかにかかった人がたくさんいた」という部分集合読みではない。単に「はしかにかかった学生がいた」という存在読みであり、学生は

stage レベルである。このように、stage から object へのアップデートは、存在文のなかで「存在の *il y a*」に特有の操作だと考えられる。

7. 不定名詞句と同一指示のパラドックス

前節の最後で、object へのアップデートは「存在の *il y a*」に特有の操作だと述べた。しかし、「存在の *il y a*」だけにこのような特殊な意味論的操作を想定するのは、場当たりの解決法と見なされるかもしれない。上に示した想定が妥当であるためには、アップデート操作が「存在の *il y a*」だけでなく、他の広汎な言語現象に見られることを示せた方が望ましい。この節ではアップデート操作が、代名詞照応における同一指示の問題の解明に、独立の動機から必要であることを論じる。

形式意味論では一般に、不定名詞句は変数として表現され、存在量化子などの演算子に束縛されねばならないとされている。不定名詞句に与えられる論理式はふつう次のようなものである。

(29) *Un garçon est entré.*

(男の子が一人入って来た)

$\exists x [\text{garçon}(x) \wedge \text{entrer}(x)]$

ところが、このように不定名詞句を存在量化表現に翻訳すると、重大な問題が生じることが知られている。演算子は作用域を持ち、存在量化子の作用域は文の終わりとされている。すると、後続談話で同一指示の照応的代名詞が用いられたときに、代名詞が指すものを計算できないという難問が生じる。

(30) *Un garçon est entré. Il s'est assis dans un fauteuil.*

(男の子が一人入って来た。彼はソファに座った。)

$\exists x [\text{garçon}(x) \wedge \text{entrer}(x)] [\text{s'asseoir-dans-un-fauteuil}(il)]$

上のふたつ目の式の変数位置の *il* と *un garçon* の同一指示関係を表現できない。これは意味論ではよく知られた問題で、現在までに数々の解決策が提案されてきた⁷。たとえば Geach (1962) は、一連の談話を構成する複数の文を、ひとつの存在量化子の作用域に入れることを提案した。この方式だと(30)は次のようになり、束縛関係は正しく表現される。

(31) $\exists x [\text{garçon}(x) \wedge \text{entrer}(x) \wedge \text{s'asseoir-dans-un-fauteuil}(x)]$

ところがこの提案には Strawson (1952) から次のような難点が指摘された。

(32) A : *A man fell over the edge.*

B : *He didn't fall ; he jumped.*

$\exists x [\text{man}(x) \wedge \text{fall-over-the-edge}(x) \wedge \neg \text{fall-over-the-edge}(x) \wedge \text{jump-over-the-edge}(x)]$

A と B の会話からなる談話をひとつの存在量化子の作用域に入れると、男が縁から転落し、かつ転落せず、かつ自分から飛び降りたという矛盾した意味になってしまう⁸。

Lewis (1979)は、名詞句の指示対象の談話内での「卓立」(saliency)が、照応的代名詞の使用を可能にするという仮説を唱えた。Evans (1980)は「E-type 代名詞アプローチ」によって、照応的代名詞を定名詞句で書き換える処理を提案した。また、Heim (1988)は談話のなかで束縛されずに残った変数を、存在化閉包 (existential closure)に入れてしまうという談話的処理を提案した。本稿ではこれらの提案を詳細に検討する余裕がないが、いくつかの点だけ指摘しておきたい。

Evans (1980)の「E-type 代名詞アプローチ」は、かんたんに言えば、照応的代名詞は偽装された定名詞句だというもので、次例(33a)の代名詞 *them* を (33b)のように定名詞句に書き換えるという提案である。

- (33) a. John owns some sheep and Harry vaccinates *them*.
b. John owns some sheep and Harry vaccinates the sheep that John owns.

こうすると (33b)には次の式を与えることができる。

- (34) $\exists x [\text{sheep}(x) \wedge \text{own}(\text{John}, x)] , \forall x [\text{sheep}(x) \wedge \text{own}(\text{John}, x) \rightarrow \text{vaccinate}(\text{Harry}, x)]$

E-type 代名詞の *them* は *the sheep that John owns* に書きかえられることで表現を得ることができ、かつ *Harry* は *John* の所有するすべての羊に予防接種をしたという正しい意味を表すことができる。

これで一見うまく行くように見えるが、この方式には次のような問題点がある。代名詞の *them* を定名詞句に書き換えるときに、どのような手続きによって正しい定名詞句が得られるのかという説明が Evans にはない。このため次のようなことが起きる。

- (35) A dog came in. *It* lay down under the table. *It* barked twice.

後続文のひとつ目の代名詞 *it* は *the dog that came in* で書き換えるとして、ふたつ目の *it* は *the dog that came in* で書き換えるべきだろうか、それとも *the dog that lay down under the table* で書き換えるべきだろうか。

談話における同一指示の連続性という点から考えれば、犬はまず入って来て、次にテーブルの下に横たわり、次に二度吠えたのである。するとひとつ目の *it* が指しているのは、「入って来た犬」だが、ふたつ目の *it* が指しているのは「入って来て、テーブルの下に横たわった犬」でなくてはならない。もしこれが正しければ、ふたつ目の *it* は *the dog that came in and lay down under the table* で書き換えることになるのだが、この複合的な定名詞句は先行談話からどのような手続きを経て形成されるのだろうか。またこれが正しければ、ひとつ目の *it* とふたつ目の *it* は同一指示でありながら、ふたつの *it* の指示対象の記述的

内容が変化していることになる。

なぜこのような事態になるのだろうか。その理由は明らかで、談話の「累積性」(cumulativité) を考慮していないからである。談話が進行するにともない、談話情報は海底に降り積もるマリンスノーのように、古いものの上に新しいものが蓄積されてゆく。ところが変数と演算子と作用域を主要な道具とする形式意味論は、この「談話の累積性」を表現するのが苦手である。このため、「入って来た犬」が「入って来て、テーブルの下に横たわった犬」に更新され、次に「入って来て、テーブルの下に横たわり、二度吠えた犬」へとさらに更新される過程を表すことができないのである。Evans の E-type アプローチにも同じ難点を指摘することができる。

8. 同一指示とアップデート操作

さて、ではどのように考えればよいか、とりわけ 6 節で提案した stage から object へのアップデート操作とこの問題がどう関係するかである。

おおまかに道筋を示しておこう。stage レベルの存在は出来事文に生じ、出来事の生起によりその存在を与えられる⁹。Un garçon est venu. (男の子が一人やって来た) という出来事文の不定名詞句 un garçon (男の子) は stage レベルで、「やって来た」という出来事のなかでのみ存在を持つ。stage レベルの存在は出来事に依存するため、短期的にしか存在を得ることができない。また stage レベルの存在には、自身が含まれる出来事文が付与する情報以外の談話情報を与えることができない。比喩的に言えば、stage レベルの存在には記憶がないのである。

Un garçon est venu. Il s'est assis dans un fauteuil. (男の子が一人やって来た。彼はソファに座った。) を構成するふたつの文は、いずれも出来事文である。ひとつ目の出来事を e1 とし、ふたつ目の出来事を e2 としよう。e1 が切り出す stage と e2 が切り出す stage は、厳密に言えば時間も空間も異なる。しかも、stage が談話記憶を保持できないとすると、ふたつの stage に同一指示関係を立てることは不可能である。

ではどうするかと言うと、ひとつ目の文 Un garçon est venu. が最後まで処理された段階で、un garçon (男の子) の stage から object へのアップデート操作が起きると仮定するのである。object は時間に束縛されない安定した存在であるため、照応的代名詞による同一指示を保証することができる。また、object は談話記憶を保持できるので、Evans について指摘したような指示対象の記述内容が刻々変化するという累積性を確保できる。

以上の粗筋に含まれる仮説は次の 3 つである。

仮説 1

stage レベルの存在に代名詞による同一指示関係を立てることはできない。

仮説 2

代名詞による同一指示関係を立てることはできるのは、object レベルの存在のあいだだけである¹⁰。

仮説 3

出来事文に含まれた不定名詞句が表す stage レベルの存在は、その文の処理が終了した

時点で object レベルにアップデートされる。

9. アップデート操作と談話モデル

さて、前節でおおまかな筋道を示した同一指示の処理方法をより厳密に定式化する方法を考えてみよう。筆者は東郷（1998, 1999, 2000, 2001a, 2001b, 2002）で、名詞句や代名詞の指示と照応を処理するモデルとして、談話モデル理論を提案した。談話モデル理論は Fauconnier のメンタル・スペース理論に基づく談話処理のモデルである。ここでその詳細を解説する紙幅がないので、必要な点のみ以下に要約する。

談話モデルは、i) 共有知識領域 ii) 発話状況領域 iii) 言語文脈領域の3つのスペースから成る。共有知識領域には、世界についての百科事典的知識や、個人的なエピソード記憶が登録されている。発話状況領域は、話し手と聞き手を含む直示的な発話の場である。談話の伝える情報は、逐次的に言語文脈領域で処理され蓄積される。また、談話モデルは話し手と聞き手の双方が心内に保持し、談話の進行とともに両者を更新してゆく。

談話で用いられた不定名詞句の指示対象は、Karttunen（1976）の言う意味での談話指示子(discourse referent)として、言語文脈領域に新たに登録される。また、固有名(ex. Columbus)、類名(ex. le chien)、唯一物(ex. le soleil)などは、共有知識領域にあらかじめ登録されているので、初出時から定名詞句を用いることができる。談話モデルの模式的表現が図1である。¹¹

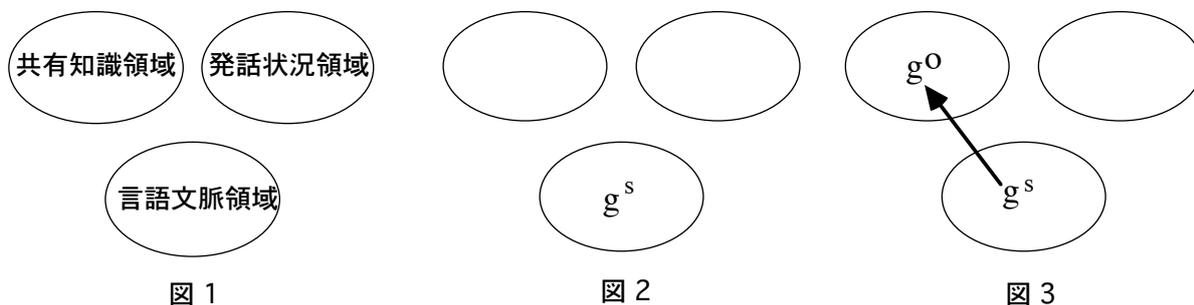


図 1

図 2

図 3

ではこのモデルを用いて不定名詞句の処理の過程を見てみよう。Un garçon est venu.（男の子が一人やって来た）の不定名詞句 un garçon（男の子）の談話指示子を g と書く。この文の発話により、 g が言語文脈領域に登録される（図 2）。

g^s は stage レベルだが、ここで $\exists x^s [R(x^s, P^k)] \rightarrow \exists x^o [R(x^s, x^o)]$ のアップデート操作が行なわれ、 g^s は g^o へアップデートされる。問題はアップデートされた g^o がどこへ保管されるかである。ここで次の仮説を提案する。

仮説 4

アップデートされた object レベルの談話指示子は、言語文脈領域から共有知識領域へ転送され保管される。

共有知識領域は百科事典的知識やエピソード記憶などが保管されている記憶領域である。

ここに保管されているのは、「ナポレオン」や「エッフェル塔」などに相当する談話指示子と、それらに関する情報ファイルである。言語文脈領域で処理された談話記憶もこれと同じように、情報ファイルが添付した談話指示子として保管されると考えられる。

仮説4が正しいとすると、アップデートと領域転送は上の図3のように起きる。共有知識領域に登録されるということは、不定名詞句 *un garçon* (男の子) の指示対象が、「ナポレオン」のような固有名や「エッフェル塔」のような唯一物と同じように扱われるということの意味する。当該の談話で *un garçon* が表しているのは、「やって来た唯一の男の子」だからである。ここから次の仮説を提案する。

仮説5

stage から object へアップデートされた談話指示子は、後続談話で変数ではなく定数として処理される。

Un garçon est venu. (男の子が一人やって来た) の次に、*Il s'est assis dans un fauteuil.* (彼はソファーに座った) という文が続くとする。第8節で提案した仮説2により、同一指示関係を結ぶことができるのは、上図の g^s ではなく g^o である。したがって、照応的代名詞 *il* が同定することを求められる談話指示子は図2の g^s ではなく、図3の共有知識領域に登録された g^o である。共有知識領域に登録された談話指示子には、談話情報を書き込む情報ファイルが添付されていると考えられる。したがって、最初は () *est venu.* (やって来た) という情報しかない g^o の情報ファイルには、後続文の () *s'est assis dans un fauteuil.* (ソファーに座った) という情報が追加される。この段階で g^o には「やって来て、ソファーに座った」という累積的な談話情報が添付されることになる。これを形式意味論風書くと、次のようになるだろう。

$$\exists g^s [R(g^s, \text{GARCON}^k \wedge \text{venir}(g^s)), [s'asseoir-dans-un-fauteuil(g^o)]]$$

g^s は変数なので存在量化子に束縛されねばならない。しかし仮説5が正しいならば、 g^o はもはや変数ではなく定数なので、演算子に束縛される必要はない。

このように stage から object のアップデート操作は、「存在の *il y a*」の部分集合読みを説明するためだけでなく、不定名詞句を先行詞とする同一指示の現象を説明するためにも必要なものなのである。

10. 談話モデルと *il y a* 構文の存在領域

第5節で、「所在の *il y a*」と「存在の *il y a*」とでは存在領域が異なり、前者は場所句の表す時空間で、後者は実主語の主要名詞の母集合であるとした。このちがいが談話モデルの構成とどのように関係するかを見てみよう。

(36) *Il y avait des garçons dans la cour.*

(校庭には男の子が数人いた)

「所在の il y a」では、文が作り出す物語の空間（「校庭」をその中に含む）が言語文脈領域に形成され、des garçons（数人の男の子）の談話指示子はその空間内に知覚可能な stage レベルとして存在する（図 4）。一方、「存在の il y a」では実主語の談話指示子は object レベルである。だから、Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.（アメリカ人のなかにはオペラ好きな人がたくさんいる）の Américains（アメリカ人）も、その部分集合である Américains qui aiment l'opéra（オペラの好きなアメリカ人）も、言語文脈領域にではなく、共有知識領域に知識として把握される要素の集合として存在する（図 5）。

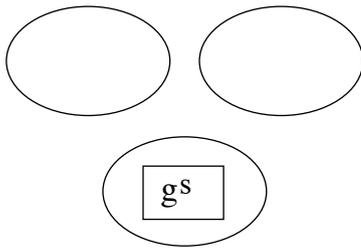


図 4

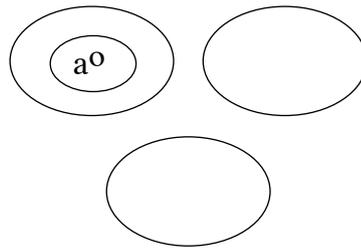


図 5

このため、Il y avait des garçons dans la cour.（校庭には男の子が数人いた）は、話し手が自分の目で見たかのような具体的な存在描写であるのにたいして、Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.（アメリカ人のなかにはオペラ好きな人がたくさんいる）は具体性に欠け、概念的・観念的な存在としての把握となる¹²。

この「所在の il y a」の具体性と、「存在の il y a」の抽象性は、照応過程に興味深い差を生じることがある。

(37) a. Il y avait des garçons dans la cour. Ils jouaient avec du sable.

（校庭には男の子が数人いた。彼らは砂遊びをしていた。）

b. Il y a des petites filles dans le jardin. Vous les connaissez ?

（庭には女の子が数人いる。あなたは彼女たちを知っていますか。）

(38) a. Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra. ?Ils préfèrent les œuvres de Verdi.

（アメリカ人のなかにはオペラ好きな人がたくさんいる。彼らはヴェルディの作品が好きだ。）

b. Il y a pas mal d'étudiants qui ont attrapé la rougeole cette année. ??Vous les connaissez ?

（今年は学生のなかにはしかにかかった人が大勢いる。あなたは彼らを知っていますか。）

(37a)の ils と(37b)の les の照応は極めて自然で問題がない。ところが、(38a)の ils の照応は問題なしとするフランス人がいる一方で、不自然とするフランス人もいる。また(38b)の les による照応はかなり不自然と判定される。

これは同一指示関係の可否や談話指示子の存在レベルの問題ではなく、共有知識領域で形成される集合の大きさと抽象度に関わる問題だと考えられる。「オペラの好きなアメリカ人」は概念的に把握された大きな集合であるため、ils による照応に抵抗が生じるのだろう。

「今年はしかにかかった学生」も同様に、*Vous les connaissez?* (あなたは彼らを知っていますか) のような具体性の強い発話とそぐわない。ただし、この現象は不定名詞句の指示対象の「特定性」(specificity)と関わる可能性もあり、詳細は今後の課題としたい。

11. おわりに

本稿ではフランス語の存在文のうち「所在の *il y a*」と「存在の *il y a*」を対象として、両者のあいだでは指示対象の存在領域が異なるのみならず、その存在レベルも「所在の *il y a*」は stage、「存在の *il y a*」は object と異なることを示した。またこの存在領域のちがいは談話モデル理論ではモデルを構成する領域の差として表現でき、stage レベルの存在は言語文脈領域に登録され、object レベルの存在は共有知識領域で同定されるという分析を提案した。

また「存在の *il y a*」で関係節に局面レベル述語を持つ文を分析し、これらの文では stage から object へのアップデートが行なわれるという仮説を提示した。stage から object へのアップデートは「存在の *il y a*」に限定されるものではなく、不定名詞句の照応過程全般にわたって必要とされると見なすことができる。

存在文の他のタイプである「出来事の *il y a*」「擬似関係節の *il y a*」「リスト文」には紙幅の関係で考察が及ばなかった。これらのタイプについても、談話指示子の「存在領域」と「存在レベル」に関して興味深い現象が観察されるが、これについては稿を改めて論じることとする。

【注】

- 1 「三分構造」(structure tripartite) では[量化子][制限節][核作用域]という三分構成をとる。*La plupart des garçons ont choisi le Big-Mac.* (男の子の大部分はビッグマックを選んだ) は *la plupart [garçon (x)] [choisir-le-Big-Mac (x)]* と表現され、制限節は量化子 *la plupart* が走る範囲を指定する。
- 2 古川(1996)は (6) *Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.* の *Américains* を *localisateur* と呼んでいるが、その意味は本稿で言う量化子が走る制限節と同じものであると考えてよい。
- 3 「犬のポチ」のような生物には寿命があるので、永続的に存在することはできないが、object レベルの存在は一般に永久とは言わなくてもある程度の時間幅にわたって存在するものと考えられている。
- 4 Lumsden は Prince (1978) の *assumption model* を用いて説明しており、もう少し技術的に細かい説明であるが、ここでは紙幅の関係で簡略に留める。
- 5 stage レベルから object レベルへのアップデートというアイデアは、Lumsden (1988) に見られるが、Lumsden は $\exists x^s [R(x^s, P^k)] \rightarrow \exists x^o [R(x^o, P^k)]$ という式を提案している。しかし、本文で提案した式の方がより Carlson のアイデアに忠実である。また Lumsden(1988)ではこのアップデート操作は、単なるアイデアに留まっており、本稿の第7節、第8節で試みたような意味論の原理として展開されていない。
- 6 ただし、(27)のアップデート後の式における *attraper-la-rougeole (x^o)*の部分については、

さらに考察が必要である。なぜなら、attraper la rougeole は局面レベル述語であり、stage レベルの変数を取るからである。ここでは「はしかにかかった」という局面レベル述語から、「はしかにかかったことがある」という個体レベル述語への昇格が起きると考えられるが、詳細は今後の課題とする。

7 不定名詞句の同一指示の問題の解決の試みの詳細は Heim (1988)を参照のこと。

8 Strawson が示したふたりの話者による談話に矛盾しない論理表現を与えるためには、「話し手の視点」もしくは「話し手と聞き手の心的モデル」を立てる必要がある。これはとりも直さずメンタル・スペース理論的な理論構築へと直結するものであるが、ここでは詳しくは論じない。

9 Milsark (1974)、Danon-Boileau (1989)などを参照のこと。

10 kind レベルの同一指示が特有の問題を呈することは、Milner (1982)が指摘しているところである。ふつうは、Un garçon est venu. {Il / Le} garçon.... (男の子がやって来た。彼は/男の子は...) のように、不定名詞句は代名詞照応も定名詞句照応も可能だが、Un cheval est un mammifère. {Il / *Le cheval} se laisse domestiquer. (馬は哺乳動物である。それは/*馬は飼い慣らすことができる) のように、総称読みの不定名詞句は定名詞句照応できない。kind レベルの照応はこのような問題を含むので、仮説 2 は object レベルだけを考えている。

11 談話モデル理論では、話し手のモデルと聞き手のモデルを想定し、両者の調整操作が大きな役割を占めるが、本稿で問題にしている stage から object へのアップデートではモデルの調整の問題が生じない。図を簡略にするため、話し手側のモデルのみを図示する。

12 金水(2002)は日本語の存在表現を 2 種類に分けて、「限量的存在文」を時間を捨象した抽象性・観念性の強いタイプ、「空間的存在文」を時間幅を意味として含み具体性・実体性が強いタイプと規定した。金水の「限量的存在文」と「空間的存在文」は、本稿の「存在の il y a」と「所在の il y a」におおまかに対応する。金水の分析は多くの重要な提案を含んでおり、本稿との比較検討が必要だが、紙幅の関係で今後の課題としたい。

【参考文献】

- Cannings, Peter. (1978) Definiteness and Relevance. Margariat Suñer (ed) *Contemporary Studies in Romance Linguistics*, pp.62-89. Washington: Georgetown University Press.
- Carlson, Gregory, N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Ph.D.dissertation. Amherst:University of Massachusetts.
- Danon-Boileau, Laurent. (1989) La Détermination du Sujet.*Langages* 94:pp. 39-72
- Diesing, Molly .(1992) *Indefinites*. Cambridge:The MIT Press.
- Evans, Gareth. (1980) *Pronouns*. *Linguistic Inquiry* 2:pp.337-362.
- Geach, Peter, T. (1962) *Reference and Generality*. Berkeley: University of California Press.
- Heim, Irene, R. (1988) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*. Ph.D.dissertation. Amherst : University of Massachusetts.
- Karttunen , Lauri.(1976) Discourse Referents. J.D.McCawley (ed) *Syntax and Semantics 7. Notes from the Linguistic Underground*. pp. 363-386.New York:Academic Press.
- Lakoff, George. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the*

- Mind*. Chicago : The University of Chicago Press.
- Lewis, David. (1979) Scorekeeping in a Language Game. R.Bäuerle et al. (eds) *Semantics from Different Point of View*. pp.172-187. Berlin: Springer-Verlag.
- Lumsden, Michael. (1988) *Existential Sentences: Their Structure and Meaning*. London: Routledge.
- McCawley, James, D. (1981) The Syntax and Semantics of English Relative Clauses. *Lingua* 53:pp.99-149.
- Milner, Jean-Claude. (1982) *Ordres et Raisons de Langue*. Paris : Editions du Seuil.
- Milsark, Gary, L. (1974) *Existential Sentences in English*. Ph.D.dessertation. Amherst: University of Massachusetts.
- Prince, Ellen, F.(1978) On the Function of Existential Presupposition in Discourse. *CLS* 14:pp.362-376
- Strawson , Peter, F.(1952) *Introduction to Logical Theory*. London:Methuen.
- 朝倉季雄(1981)『フランス文法ノート』白水社.
- 金水敏 (2002)「存在表現の構造と意味」近代語学会編『近代語研究』11:pp.475-493.
- 東郷雄二(1998)「談話モデルと指示」『話し言葉のフランス語に見る文法の形成過程の研究』. 文部科学省科学研究費成果報告書.pp.34-57.
- 東郷雄二(1999)「談話モデルと指示—談話における指示対象の確立と同定をめぐって」、『総合人間学部紀要』6.京都大学:pp.35-46.
- 東郷雄二(2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『総合人間学部紀要』7. 京都大学: pp.27-46.
- 東郷雄二(2001a)「定名詞句の指示と対象同定のメカニズム」『フランス語学研究』35.日本フランス語学会: pp.1-15.
- 東郷雄二(2001b)「定名詞句の『現場指示的用法』について」『総合人間学部紀要』8.京都大学: pp.1-17
- 東郷雄二(2002)「不定名詞句の指示と談話モデル」『談話処理における照応過程の研究』文部科学省科学研究費成果報告書.pp.1-35.
- 東郷雄二 (2005)「談話の構築と領域」木下教授喜寿記念論文集編集委員会編『フランス語学研究の現在—木下教授喜寿記念論文集』 pp.55-74. 白水社.
- 古川直世 (1996)「Il y a beaucoup d'Américains qui aiment l'opéra.型構文について」『フランス語学研究』30. 日本フランス語学会:pp.34-35.